

解説；杏雲堂平塚病院は明治 29(1896)年に創設以来、初代院長の佐々木政吉は昭和 5(1930)年まで 34 年間に渡ってその職を務め、70 歳をもって職を佐々木隆興に譲り顧問に就任した。大正 14(1925)年、佐々木政吉の古希を記念した祝賀寿像が彫刻家武石弘三郎の手によって完成し、杏雲堂平塚病院正面に設置され、その折りの記録である。現在、佐々木政吉像は御茶の水の杏雲堂病院玄関前に、佐々木東洋像、佐々木隆興像とともに設置されている。なお、平塚病院は諸般の事情により、平成 16 年 4 月 1 日を以て閉院し 107 年の歴史を閉じた。(筆者の杉野大沢氏については全く不明である)。

佐々木政吉先生祝賀寿像除幕式

杉野大沢

大正十四年、十月十八日、平塚分院玄関前広場の一角に、政吉院長古稀寿像が建設せられ、その除幕式があつた。

名士の祝辞がのべられたあとでの曼洞翁（注；小池重 杏雲堂平塚病院副院長）の祝辞は、次のような言葉であつた。

「明治二十九年、先生が結核療養所の必要を感じられ、地を湘南地方に物色せられ、結局この平塚海岸に決定せられし所以は、第一、海岸が南方に面し、且つ清浄なること。第二、空気が新鮮にして且つ松林に富めること。第三、地下水が清冷にして且つ地質の白砂にて乾燥せること。第四、人煙疎にしてしかも東京よりの交通不便ならざること等が好条件であつたからと思はれます。私此分院の建築最中に此地に参つたことがあります、当時の素漠たる光景は今猶ほ思ひ出されます。日没後は人里遠きために到底外出出来ぬ。見渡す限り暗黒で、松風の音か梟の鳴く声か、若くは犬の遠吠か、狐狸の出没する異常の響きより外に聞くものはなかつた。時には先生の御住居へあやしき賊の忍び入りしことさへあつたと云ふことであります。

今日でこそ、此海岸に道路も出来、商店も出来、旅館も出来、多数の別荘も出来、人車・馬車・自動車まで往来するやうになりました。これは偏に杏雲堂分院の設立せられたるお蔭、換言すれば、先生の御恩沢によるものと存じます。我国では今日でこそ、到る処の海辺に療養所が出来まして、呼吸器病者は、自然療法の大福音に浴しつつありますが、当平塚海辺に当杏雲堂分院の出来る頃は、一般世間でも刀圭界でも、まだ空気日光の応用、則ち気候療法に注意せしものはありませんでした。先生が第二回の洋行よりご帰朝後此点に着眼して白砂青松の平塚海辺に療養所を設けられしは、我国結核療養所史上に特筆大書すべきことと思ひます。此意味に於ても亦先生の寿像を此平塚海辺に建設することは大いに意義あることと存じます。

私は更に進みて先生の徳を敬慕し、先生の行を頌讃する意味に於て、僭越ながら先生の態度につき申し上げます。先生は常に温顔を以て人に接し、悠々として迫らず、綽々として余裕あり、清廉潔白、純真無垢、さながら生れた時その儘の偉大なる坊チャンを想像せしめます。先生の御気性は進取的か、保守的か、これは見方によって進取的の処もあり、保守的の処もある。私が永年、先生に親炙せる間の先生は結核治療といふ点には極めて進取的であり、世間通俗の社交には極めて保守的であつた。これは恐らくは、社交がお好きでないからだと思はれる云々」

「高山樗牛と佐々木政吉」から（日本医事新報、昭和 34 年 7 月）